

私は今、一筋の光に導かれて、新しい世界へ飛び込もうとしています。でも、二年前の私は、今とは全く違っていました。

小学六年生の三学期、母から、私の目が網膜色素変性症という病気にかかっていることを告げられました。調べてみると、衝撃的なことが書かれていました。この病気は夜盲、視野狭窄、視力低下などがあり、若くして発症した場合、三十代から四十代ほどで失明してしまう可能性があるので。眼鏡をかけても教科書や黒板の文字が見えず、自分の目は、あまり良くないと分かっていましたが、そこまで悪いとは夢にも思っていませんでした。

「もし、本当に見えなくなったらどうしよう。」

驚きと不安が一気に押し寄せてきて、とても怖くなりました。

そんなある日、視覚に障害のある人たちが通う「盲学校」という学校があることを知りました。

「そこに通えばこれからどうしていけばいいのか学べるかもしれない。」

一筋の光が見えたような気がして、その光に導かれるように、私は盲学校に入学しました。

そこで、私は点字に出会いました。私はそれまで、点字は普通の文字が浮き出たものだと思っていました。実際は、六つの点を組み合わせでできている文字でした。たった六つの点で、五十音、数字、英語、楽譜、何でも表せ、世界共通の文字だということにとっても驚きました。私にとって「点字を読む」ということはまるで暗号を解読するかのようで、とてもわくわくします。でも、やはり、長文を読むことは難しく、読むスピードが遅いと、始めの部分を忘れてしまいます。それでも諦めず、読み続けていくうちに、自分でも手応えを感じるほど上達しました。以前はできなかったことができるようになったとき、「もつと読めるようになりたい。」「もつとたくさんの文字や記号を知りたい。」と思いました。今は、数字や英語にも挑戦しています。これからもつと練習して、点字を使いこなせるようになりたいです。

私はたまにふと、思うことがあります。「自分は何故こんなに点字の勉強に熱中しているのだろう。」と。

でも、その答えはもう出ています。それは、将来、もし点字を使って生活することになってしまったとしても、「あのとき頑張つて、たくさん勉強しておいて良かった。」と胸を張つてそう思えるようになるためです。ですから、そのためにも、今はもつともつと頑張りたいです。小学六年生のあの時、私は

「失明してしまつたらどうしよう。きつと暗くて、辛くて、不幸になる。」

そう思っていました。でも、今の私はそんなことは思っていない。見えなくなつてしまふことは怖いけれど、不幸になるとは思っていない。それは、盲学校に来たことで知れた「新しい世界」のお陰です。

今、あの一筋の光は、再び私の前に現れようとしています。志望校合格という目標ができたからです。受験という壁を越え、その光が導いてくれる「新しい世界」に飛び込んでいきたいです。

そして力を蓄え、いつの日か、障害の有り無しに関わらず、多くの人々と肩を並べて共に生きていきたいです。

皆さんにも、辛いことや不安なことはあると思います。そんな時こそ、自分にとつての「新しい世界」を見つけてみてください。そして、そこへ飛び込んでみましょう。あの日の私のように！